

統計望楼

数字から知る 人々の心理と行動

第4回 災害対応従事者こそ 安否確認の準備を！



名古屋大学大学院
環境学研究科
(名古屋大学災害対策室)

木村 玲欧

はじめに

今回は「震災による大きな衝撃を受けた人は、四つの段階を一つずつ達成することによって生活を建て直していく」という「災害過程」「生活再建過程」について紹介したあと、災害後の人々を襲う最初の試練である「失見当（しつげんとう）」について、その実態と失見当を乗り切る方法について紹介しました。

今回は、失見当期（震災当日）から被災地社会の成立期（震災当日～震

災後2～4日間）にかけての重要な行動である「安否確認」について取り上げて、その実態と効果的な安否確認方法について考えていきたいと思います。

特に、災害対応従事者にとっては、職務を遂行しながら自分の家族の安否確認を行い、その後も定期的に安否確認をとり続けなければなりません。しかし「職務に追われて、自分の家族とうまく連絡がとれなかった。仕事をしながらも家族のことがずっと気掛かりだった」などという体験談も散見されます。そこでどのような安否確認手段が有効なのかについても、後半で述べたいと思います。

1. 安否確認がその後の災害対応を左右する

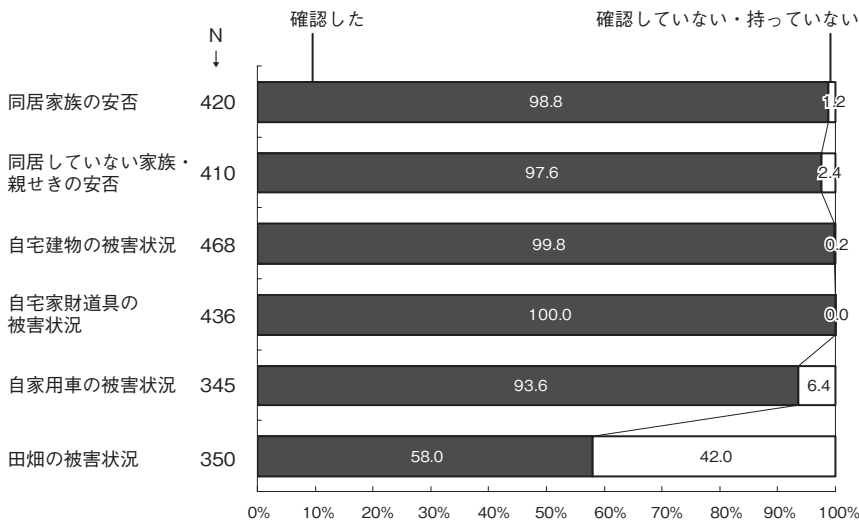
まず安否確認とは何かを考えてみましょう。安否確認は「自分にとって大切なヒト・コト・モノが無事かどうかを確認すること」と定義できます。ここでのポイントは、人だけではなく、大切な事物についての確認も安否確認の対象に入ることです。以前、被災者の方から「母の形見の指輪が、どうしても見つからなかった。二度と手に入らないものだから、避難するときに何でちゃんと確認しなかったのか、今でも悔やんでいる」という話を聞いたことがあります。人命の確認はもちろん重要課題ですが、形見の品や写真、権利書・通帳・印鑑など、自分にとって大切な事物について確認することも不可欠です。

災害時の安否確認では、「何を確認すべきか」「どのような手段で確認すべきか」の二つのことを考える必要があります。特にヒトの安否については、落ち合う場所や落ち合えなかったときの連絡方法を、あらかじめ取り決めておくことが、前回「失見当（しつげんとう）」で取り上げた「必要以上に慌てない」ために重要です。

また、被災者のインタビュー調査で、しばしば「安否確認がすんなりいったからよかった」とか「いつまでも家族が無事かどうかわからずに、ただそれだけが気がかりで、他のことなど手につかなかった」という話を

よく聞きます。安否確認ができなかった場合には、安否確認が完了するまで、人々は安否確認ばかりが頭について「居ても立ってもいられない」状況になってしまいます。そうすると、他に行うべきたくさんの方の行動に身を入れて取り掛かることができません。その後の災害対応も含めて、何もかもが後手、後手に回ってしまいます。安否確認に多くの時間を奪われないことは、災害をうまく乗り切るためのキー・ポイントなのです。

図1：安否・被害状況確認をした割合



木村玲欧他（2005）新潟県中越地震における被災者の避難行動と再建過程，地域安全学会論文集

2. 安否確認は迅速に順番立てて行われている

次に安否確認の全体像を見てみましょう。新潟県中越地震の被災者に対して行った社会調査の結果を見てみましょう。この調査では、安否確認を「安否・被害状況確認」として、1.同居家族の安否、2.同居していない家族・親せきの安否、3.自宅建物の被害状況、4.自宅家財道具の被害状況、5.自家用車の被害状況、6.田畑の被害状況、の6種類の安否・被害状況確認について「いつ確認をしましたか。あてはまる時点・時期に○をつけてください」という質問をしました。

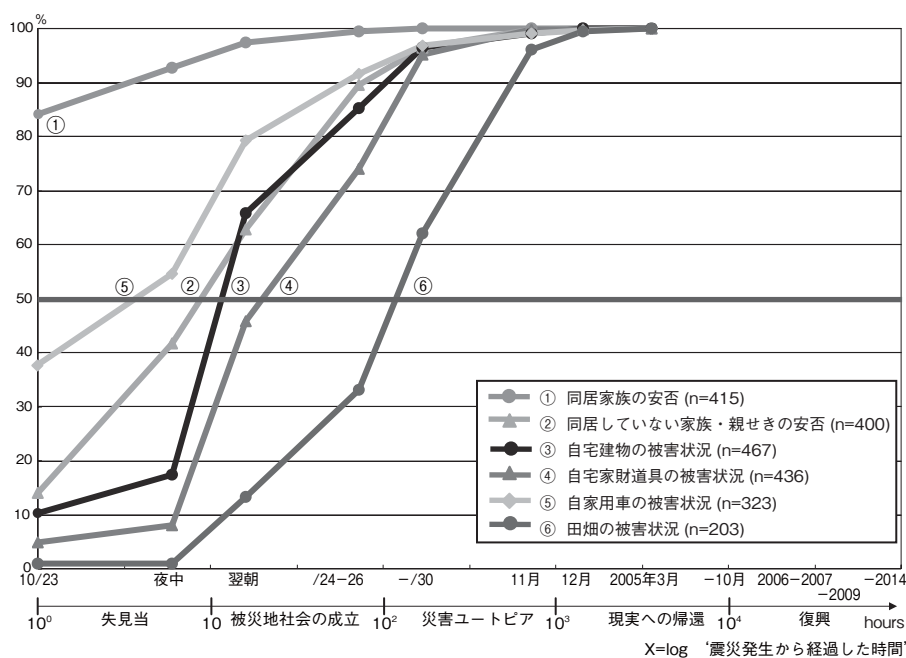
まず、6種類の安否・被害状況確認をしたかどうかについてまとめたのが図1です。これを見ると、田畑の被害状況確認を除いて、ほとんどの人がそれぞれの安否・被害状況確認を実際に行っていることがわかりました。この結果を見ると、安否・被害状況確認は、災害時にはほぼすべての人が行っている活動であることがわかります。

次に、それぞれの安否・被害状況確認をいつ行ったのかという「時期」について明らかにしたのが図2になります。図2の横軸は、時間の流れを表しています。いちばん左が地震発生の2004年10月23日、そこから10時間（震災当日（翌朝）、100時間（震災後数日）、1000時間（震災後約2カ月）と時間が経過していきます。また縦軸は、各項目について「横軸の時点までに安否・被害状況確認を行った」と回答した人の割合を表しています。

図2を見ると、安否・被害状況確認の順番がわかります。まずは同居家族の安否確認で、地震直後1時間までに8割以上の人が安否確認を行っていました。その次は、自家用車の被害状況の確認で、地震発生10時間以内で全体の7割以上の人が確認を行っていました。家屋などの被害状況の確認の前に、避難手段となる車の確認を行っていることは、災害の現実を知らされたいへん興味深い結果だと思っています。

その後、地震発生後10時間前後で、同居していない家族の安否確認、自宅建物・自宅家財道具の被害状況の確認を全体の半数以上の人が行っていることがわかりました。また田畑の被害状況の確認は、地震後100時間の段

図2：安否・被害状況確認をした時期



木村玲啓他（2005）新潟県中越地震における被災者の避難行動と再建過程，地域安全学会論文集

階で行っていました。以上のように被災地全体でみると、安否確認は災害後の早い段階で迅速に行われていることがわかりました。

図4：杉浦隆三さんの被災体験



画：藤田哲也

明治村西端集落（現在の碧南市湖西町）にいた原田三郎さん（当時25歳）は、家から外に抜け出し隣家のおばあさんを救出したあと、当時近衛兵だった原田さんが真っ先に考えたことは「小学校にある両陛下の御真影を安全な場所に移す」ことでした。そのため小学校まで駆けつけて、両陛下の御真影を自分の家の蔵に移しました（図5）。

図3：岡田菊雄さんの被災体験



画：阪野智啓

明治村東端集落（現在の安城市東端町）にいた杉浦隆三さん（当時20歳）は、余震の中、納屋に避難をして家族みんなで震えていました。しかし父親だけは、同じ集落のはずれに嫁いだ娘の安否が気になったため、余震が続きガレキが散乱する集落の中を、必死になって娘の嫁ぎ先まで走っていきました（図4）。

まずは、碧海郡明治村根崎集落（現在の愛知県安城市根崎町）にいた岡田菊雄さん（当時12歳）です。岡田さんは全壊した家に閉じこめられました。岡田さんと妹は潰れた家から出ることができましたが、弟がいつまでたっても出てきません。そこで、父親がのこぎりを持って弟を捜しに、余震の中、潰れた家の中に入っていました。弟はあと一歩で家の外に出られるところで、鴨居の下敷きになって亡くなっていました（図3）。

全体像がわかったところで、次に一人ひとりの安否確認のようすを見ていきましょう。前回に引き続き、1945（昭和20）年1月13日に発生して死者2306人を出した、三河地震の被災者の体験談を紹介します。約60年前に起きた地震とはいえ、現代につながる多くの教訓が見えてきます。

3. 1945年三河地震における安否確認のようす

図5：原田三郎さんの被災体験



図6：小山敏夫さんの被災体験 画：阪野智啓

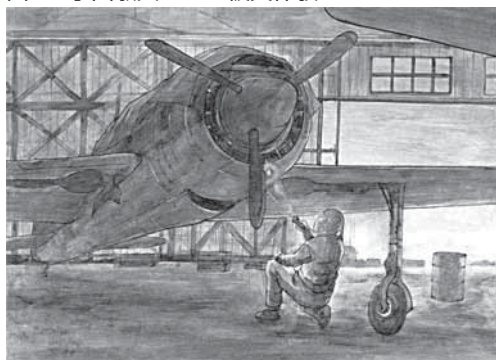


図7：小林清さんの被災体験 画：阪野智啓



画：阪野智啓

明治村に当時あった明治航空基地で整備士官をしていた小山敏夫さん（当時21歳）は、地震が起きた後、兵舎を飛び出して、急いで懐中電灯を持って自分の整備担当機であった「彗星」（戦闘機）の被害状況を確認しに行きました。担当機が無事であることがわかったため、部屋に戻りもう一度寝てしまいました（図6）。

明治村の明治航空基地で軍医をしていた小林清さん（当時29歳）は、地震時は隣接する集落に借りた家で家族と寝ていました。地震発生後、無事だった家族をそのまま置いて、医者として医療行為にあたるため、医療器具がある基地の医務室へ向かって必死に走っていききました（図7）。

これらの体験から安否確認の実態を探ってみましょう。まず、原田三郎さん・小山敏夫さんなどの事例からわかるのは「安否確認は人間だけではなく自分が大切だと認識している事物も対象としている」ことです。特に自分の職務に関係する事物は、安否確認の対象となっていることがわかります。

また、安否確認は「とにかく何としてでも安否を確認しなくては」と被災者を強く突き動かす行動であることもわかります。安否確認が速やかに

達成された場合には、軍医だった小林清さんの体験のように、そのまま次の対応行動に移ることができそうですが、安否確認ができなかった場合には、安否確認が達成されるまで「居ても立ってもいられない」状況が続きます。なかには杉浦隆三さんや岡田菊雄さんの父親のように、まだ余震が続く危険な状態の中で、行動を起こす人もでてきます。これらを考えると、災害発生前から、安否確認の対象や手段について十分に考慮し、必要な備えを行っておく必要があることもわかります。

4. 家族の安否確認は「携帯電話メール」「災害用伝言ダイヤル171」遠方の親せき

安否確認の実態について紹介してきましたが、多くの人に当てはまる最も一般的な安否確認は「家族の安否確認」でしょう。家族の安否確認を行うとき、特に今の時代のように、少し離れたところに親・子供・親せきなどが住んでいる場合には、「走って訪ねていく」杉浦さんの経験とは違った方法で安否を確認しなければいけません。

阪神・淡路大震災のときには、安否確認に携帯電話（音声通話）が活躍しました。しかしその後、携帯電話が普及したため、大災害時には携帯電話による通話制限がかかることも十分予想され、あまり頼ることはできません。今では、①携帯電話メール、②災害用伝言ダイヤル171、③遠方の親せきを連絡拠点にする、の三つが効果的だと言われています。

①「携帯電話メール」は、2004年新潟県中越地震で大活躍しました。これは多くの携帯電話では音声とデータ（メールなど）を分けて処理していて、災害時には重要通話を確保

するため負荷の大きな音声通話に制限をかけますが、負荷の小さなデータ通信にはあまり制限をかけないからです。また、災害時に携帯電話でインターネットにつながると「災害用伝言板」がトップメニューに出てきて、そこから安否確認のやり取りができます。一度、お使いの携帯電話会社のホームページを参照してください。

②「災害用伝言ダイヤル171」も、有効な手段です。これは、災害発生時に171番に電話をかけ、音声ガイダンスに従って被災地内の電話番号（市外局番を含む）を暗証番号にすると、1件あたり30秒の伝言を計10件まで預かってくれて、聞くこともできるサービスです。震度6弱以上の揺れを観測した地震が発生したとき、もしくは地震・噴火などの発生によって被災地への通信が増加し、つながりにくい状況になった場合にサービスが開始されます。防災週間（9月1日の防災の日を含む1週間）や防災とボランティア週間（1月15日～1月21日）などの時期に体験することができるので、一度、試してみてください。

③「被災地ではない遠方にいる親せきを連絡拠点にする」ことも効果的です。災害発生時でも、固定電話・携帯電話ともに「被災地内から被災地外へ」かける電話は比較的つながりやすいと言われています。被災地外の遠方の親せきに電話をかけ、家族の安否確認の取りまとめや会社・学校への連絡をしてもらえるのならば、被災者は安否確認に忙殺されることなく速やかに別の行動に着手することができます。遠方の親せきには「災害が起これたら、家族がそれぞれ安否についてそれぞれへ電話をするので取りまとめをしてほしい。その後、私たちの安否情報について会社や学校・関係者へ安否状況の連絡をしてほしい」というお願いをしておき、安否連絡先一覧を送付して、親せき宅の電話帳などに挟んでおいてもらうのです。少し手間がかかりますが、たいへん効果的です。

以上のように、家族の安否確認には効果的な方法もあります。災害対応従事者は、自分の職務に追われるため、家族の状況がわからないまま何日も会えないことはまれではありません。迅速な家族の安否確認、定期的な家族の状況把握をいかに行うかは、災害対応従事者にこそ不可欠な備えなのかもしれません。

〈執筆者プロフィール〉

木村玲欧（きむられお）

1975年、東京都生まれ。早稲田大学卒業後、京都大学大学院を経て、2003年より名古屋大学大学院環境学研究科助手（名古屋大学災害対策室助手を併任）を勤める。2007年4月より助教。博士（情報学）（京都大学）、認定心理士、専門社会調査士。

阪神・淡路大震災、新潟県中越地震、スマトラ沖地震津波をはじめ、1944年東南海地震、1945年三河地震などを事例とした、被災者心理・行動、生活再建過程の解明と被害想定手法の研究を行っている。名古屋市「地域特性に応じた防災力向上検討委員会」委員、内閣府「災害教訓の継承に関する専門調査会 東南海地震・三河地震分科会」委員なども歴任する。

著書に『12歳からの被災者学』（NHK出版）、『三河地震60年目の真実』（中日新聞社）、『超巨大地震がやってきた―スマトラ沖地震津波に学べ』（時事通信社）、『いま活断層が危ない―中部の内陸直下型地震』（中日新聞社）などがある。